
侍狐と少女狐

天武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

侍狐と少女狐

【Nコード】

N0805Y

【作者名】

天武

【あらすじ】

二人の狐が綴る物語……

第一卷

side 玉藻

後閑末期。 朝廷の腐敗により人心は荒れ果て、災害に人々は不安に駆られた。

民が生きる希望を失ったその瞬間

黄巾党と呼ばれる組織が現れ、それに民は希望を感じ、黄巾党へ着いた。

それまでならまだ良かったであろう。

だが、一部の過激派とも言える者が賊へ成り下がり罪無き村の住民を殺し、誘拐し、食料を奪い去った。

これにより黄巾党は危険極まりない組織として、朝廷から討伐命令が下される。

それは各地に存在する群雄に伝わり、群雄達は行動を起こした。

「黄巾党結成当時はただ朝廷を打倒し、平和な世を築く為に……」

「だが、長角という者が現れてから組織は墮落した」

「彼女に洗脳され、同志達は皆変わり果てた。

救うべき者達から強奪し、それを私利私欲の為に使い続けた」

元黄巾党の一人であった男、感興はそう言って刀を携える。
その眼はまさしく復讐者の眼であった。

「行きましよう玉藻殿。彼女を倒し、共にこの国を平和を作りましようぞ」

そう言つて老兵はただ一人、黄巾党達の本体へ突撃を掛ける。

拙はその後をただゆつくりと追いかけた。

襲いかかる賊に無慈悲な一撃を与えつつ、ゆつたりと老兵の後ろを黄巾党の本陣を目指した。

「なぜ長角様の歌をお聞きにならない？ 聞けば救われるというのに！」

「救われないから、こうして肅清に出る者がいるのだ」

そう吠える文官らしき男を一太刀で叩き斬り、それに逆上した賊達をさらに斬り捨てて。

返り血が、服を、顔を、剣を汚すが拙にはそんな事どうでもよかった。

いや、どうでも良いというのは少し違つかもしれない。

私の主とも言える少女が、戦場で汚れた拙をいつも戒めていたな。

「玉藻は強いね。こんなに大きくて、たくましくて、いつも私の事を守ってくれる」

少女の言葉は、傷つき疲れ果てた拙には安息に等しかった。

孤独で世界の様々な戦争に一介の兵士として乱入し、常に己を傷つけた日々。

そんな当ても無い旅の途中で拙は少女と出会った。

雪降る森の中で出会った時、彼女はボロボロに傷ついていた。服も、体も。その可愛らしい姿とは無縁であるはず傷が少女の体に至る所にあった。

少女は雪の中、一人で靴も履かぬまま歩きだす。拙はそれを黙って見過ごせなかった。

私は少女を抱え上げると、顔を少女に向ける。

「私と旅をせぬか？ 一人より二人のほうが面白いだろ？」

少女は最初の内は驚いて声も上げなかったが、しばらくして口を開いてくれた。

私と一緒に旅がしたいの？ いいよ。一緒に行こう

少女との旅はけして楽な道ではなかった。

険しい山を越え、海を越え、戦争に巻き込まれたりした。

少女に迫る脅威を拙は無意識の内に身を挺して庇い、打ち破った。一つの脅威を打ち破る度に、拙に少女から賛美が送られた。

やったね。 玉藻！

笑顔で発せられたその言葉に、拙は今までに感じた事の無い幸福感に満たされた。

この少女は命を掛けて守り通す価値があると、拙はこの瞬間から感じ始めた。

そして今、少女は拙の後ろで私の戦いを見守っていた。

ボロボロだった服は白いワンピースに変わり、痛々しかったその傷

は癒えたも当然だった。

「うおおッ!!」

陣形を組み、突撃する賊達を一閃で薙ぎ払い、その肉を引き裂いた。賊達の血が剣に付着し、匂いが染み込む。

「なんであいつの剣はあんな刃こぼれしてんのに斬れるんだよ!？」

確かに。この剣は孤独に戦い抜いていた頃から、なまくらに等しいほど損傷していた。

だが、例えなまくらになろうとこの剣は拙の意志に答えてくれた。

少女を守りたい。その意思を、この剣は摘んでくれる。

だから、拙は少女の脅威を、立ち塞がる者を悉く粉碎していった。

side 周榆

あの戦士……。戦場に娘を連れてくるとは何を考えているのだ？

囃か？ それとも驕りか？ どちらにしてもあまりいい感じはしなかった。

だが、実力はまさしく本物であった。

こうしている間も、何十という賊を一太刀で薙ぎ払い、数千に及ぶ肉塊を作り出した。

人としてなら嫌悪するが、戦士としてなら雪蓮は大喜びしそうだ。まあ仲間にはしないだろうがな。

「冥琳。 あいつなんだけど……」

やはり気づいたか。 私は戦場を見渡しつつ、友の話を聞く。すると、意外な言葉が彼女から放たれた。

「彼、私達の仲間にすれば心強くない？」

「少なくともワシは反対だな。 あんな阿呆を引き入れるのは」

これより少し前に天の御使いが率いる義勇軍を見たが、まさしくそれに似ていた。

戦場で美女達とイチヤイチャしながら戦うあの男に……。

姿形は違えど、中身は同じ。 朝廷の官共と同じケダモノ。 討たれた敵にむしろ同情を感じるわ。

side 空孤

玉藻の攻撃に皆吹き飛ぶ。 腕を飛ばされ、足をもがれ、血の海が眼前に広がった。

だが、彼等は進軍を、迎撃を止めようとしなない。

なぜ？ なぜそこまで守りたいの？

この乱の原因である長角をなぜそこまで守りたいの？

「長角様こそ、この世に平和を与え下さる！ なぜお前らは理解できないのだ！？」

そう叫び、突撃を掛けた兵士の一人が玉藻に斬り飛ばされる。

平和を与えるならなぜ信者達を死なせる行為を行うのだろうか？
敵は朝廷だけのはずだ。 私達ではない。

「長角様の言う事は正しいのだ！ お前達はそれを理解できないのか！？」

罪の無い村人を襲って私利私欲の為に使う事に何の正しさがあるのだろうか？

長角も…… 黄巾党の人達も……

「賊も数が減ってきたな。 …… さて私達は帰るか」

「長角は？」

玉藻が剣を鞘に収め、私を肩に乗せどこかへ行こうとする。
気になった私は質問をぶつける。

「私が手を出さなくとも長角は討伐されるであろつ。

自分を守るであろつ信者はほとんど討ち取られ、その上にあの軍勢だ」

見れば確かにそうだ。

4万はいそうな程の軍勢に長角の信者は2千前後。
さらには、武器を捨てて逃げ出す者まで現れ指揮系統は混乱していた。

「どこか行く当てはあるの？」

「そういえば、この先に都があったな。そこに立ち寄ろうではないか」

そう言つて私達は都へ向けて歩き始める。

それと同時に、少し後ろから女の子の叫び声と、何かが落ちる音が聞こえた様な気がした。

都に着いた私達を待っていたのは思いがけない物であつた。そこは空気がやけに重く、昼間だというのに辺りが暗く。何より人が笑つていなかった。

「旅人や、今すぐここから立ち去りなさい」

ふと振り向くと老人がこちらを睨み付けながら、こちらに歩み寄つてきた。

「この主、劉表は暴君として君臨しております
それは自分の悪口を言うものは皆、牢屋に入れられ、処刑だ」

老人が言い終わると同時に、どこからか矢が飛んできて、老人の喉を貫いた。

老人は喉を抑え、苦しみ、喘いだ後そのまま動かなくなった。

「……ひどいね。どうして殺すのかな？」

その瞬間、何かが倒れる音が響いた。
見るとマスクを被った男達が皆急所を矢で射され、息を引き取つて

いた。

「……いくぞ。劉表とやらがいる城にの」

私は黙りながら、彼が目指す城をただ、ただ見つめた

。

第一卷（後書き）

連載するはずが、短編で出してしまい誠に申し訳ありませんでした
o r z

第二卷

side 玉藻

劉表のいる城へたどり着いたは良いが
城の入り口にいる筈であろう見張りがなぜか存在していなかった。
辺りを見渡すと、見張りであろう男二人が共に矢に刺され、倒れ果
てていた。

部下でさえ、己の逆鱗に触れるのなら殺す…… か。
なんと冷徹なものよ。

「こういう都なのです。 さあ後は我々に任せてお引取りを……」

声が聞こえたので後ろを振り返ると

たいまつを持ち、怒りを顔にだしながら武器を掲げる人の群れがい
た。

それには都の人達は無論の事、兵士らしき人間も槍を携えていた。

大方、劉表に愛する者を殺された者達なのだろう。

数は多く、それこそ戦う直前の黄巾党の連中を彷彿とさせる数であ
った。

だが、奴には拙もそれなりの用があるのでな……

「残念であるがそれはできん。 拙も奴に用があつてのう」

「……どんな用だい？」

「拙の大切な者に手を出したのだ。 それなりの報復はさせてもら

わんとな」

拙の言葉に人の群れは波が起きた様にざわめき始める。すると、代表らしき男が目の前にまで歩み寄ってきた。

「いいだろう。…だが、止めは指さないで欲しい。　肅清はあくまで私達で行う」

「……承知した。　では、先に行っておるぞ」

そう言い残し、拙は城へと入った　。

城の中は暗く、僅かな明かりとしてたいまつが少々付いてあるだけであつた。

廊下には誰の者か分からない血痕があちこちに付着しており、それが悪臭を放つ。

だが、それを臭いと感じても大して苦には思わなかった。なぜならこれと同じ匂いを幾度無く嗅いで来たからな……。

そうこうしておる内に王室らしき部屋の前へと辿り着いた。拙はトビラを開く為、ドアノブに手を掛け、勢い良く開ける。

「ワシになんのようだ！　貴様、勝手に入ってたで済むと思うな
！！」

口を開き、その第一声で暴言とは……　呆れて物が言えぬではないか。

見た目もそうだが。

「ただで済むとは思っておらん。だが、貴様は拙の大事な人に手を出した。

それに対する落とし前は果たさせてもらうぞ。よいな？ 劉表とやらよ」

そう言い放ち、拙は鞘からなまくらを引き抜き、構える。

劉表も傍に置いていた刀を持ち上げ、構えた。

「そんななまくらでワシに勝てると思うなッ！」

叫びながら刀を振り落とす劉表。

その動きは、あまりに大きく、目をつぶっても回避できるほどであった。

「フンッ！ セイツ！ ウラァ！！」

短い声を上げつつ劉表は刀を振り回すが拙に通じるわけが無く。全て刀で受け流した。

仮にも一国の主だからそれなりの力があると踏んでいたが……。これでは余りに興ざめしてしまう。

これでは子供の子守をしているのと同じよ。

正直、今までの旅で出会った豪傑共の方が数段も上であった。

ある者は己の肉体で拙の刀を弾いた事が、またある者は分身の使い手であったりと……

血が滾るほどの豪傑達であった。ああ、また彼等と剣を交えたい

ものよ……。

「ふん ワシの剣に恐れをなしたか！」

少なくともお主の剣に恐れを抱くものはおらぬと思うぞ？

劉表の言葉に少し苛立ちを感じ、思わず劉表の右腕を切り飛ばした。

「うがア！！ うがああああ……」

劉表はすぐに刀を投げ出し、切断された右手を抑える。

その姿は先ほどまで暴君であった男にしては余りに酷い姿であった。

「…許さぬ！ 許さぬぞ！！ おい誰かあの不屈き者を始末しろ！
！」

劉表が精一杯の怒声を放った。 その怒声は少なくともこの城全体に響く程であった。

しばらくして槍を構えた兵士が現れ、劉表の隣についた。

「あの不屈きものを殺した暁には、貴様等をワシの直属部隊に……」

劉表が命令を下す瞬間、隣で槍を構えた兵士が突如彼に槍を突き刺した。

啞然する劉表の事など知らず、彼をこれでもかとかばかり突き刺した。

「……清々したか？」

「…ああ。 すまねえな旅人さん」

兵士が詫びると同時に戸が開き、そこから先ほどの代表がこちらに

歩み寄ってきた。

「…ひとつ、頼み事がある。お主よ、この国の王になってくれんか？」

「……は？」

彼の口から放たれた言葉は拙を凍らせた。

どんなご都合主義を持てばそんな展開になるんだと……。

驚愕する拙を尻目に空孤は喜び、すぐに了承するよう頼み込んだ。き

仕方なく、拙は代表に了承の余地ある事を伝えた。

この瞬間、拙はこの国の王として責務をまっとうせねばならなかった。

空孤はというと、后としてこの国の責務をまっとうする事となった。

だが、それを長旅の憩いとして考えればむしろ身に余る物に感じた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0805y/>

侍狐と少女狐

2011年11月17日18時58分発行